

# 近江の懐をめぐる 7

美術家／成安造形大学准教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員

石川

亮

Name:

ISHIKAWA Ryo

Title:

Omi's *Futokoro* (The Heart of Omi): Part Seven

Summary:

Using a survey of an area in Shiga called Shukubamachi I will examine “techniques” and their “spirit” in order to answer the questions: “Why have these particular techniques been preserved and passed down?” and “What special value were they perceived to encompass?” I will also look at why these examples are so limited.

「近江の懐」とは、近江（滋賀県）という風土に根を下ろして未来社会へ向けてものづくりや新たなライフスタイルや伝統の継承などを実践し発信している人々と、それらを育む近江ならではの風土や地域社会のつながりの場である。「命の水の周辺にある暮らしの中に生きづく生業」そしてその「クオリティの高い手技や精神」に焦点を当て、主に近江の主要な街道沿いにある宿場町や門前町などを訪れ、その場で起こる独特の魅力を見つけ出すことを心がけている。

二〇一六年十二月より滋賀県文化振興事業団（二〇一七年四月よりびわ湖芸術文化財団）が発行する「湖国と文化」に「近江の懐」と題して近江の宿場町におけるものづくりやそこで育まれた精神性、次世代につながる新たな価値を写真と文で紹介する機会をあたえられた。二〇二四年一月現在まで二十七回の連載が継続されており、二〇二三年一月より二〇二三年十月までの第二十四回から第二十七回までのオリジナル文を可能な限り残し、近江学研究所紀要として再編集した。

はじめに

七回目となる「近江の懐をめぐる」二〇二三年度

の研究活動は以前のスタンスを取り戻しつつある。とは言ってみだが以前の私とは随分変わってしまった様に思う。COVID-19（新型コロナウイルス感染症）が二〇二三年五月八日に五類感染症として位置付けられたことにより、人々の暮らしは少しずつではあるがソーシャルディスタンスといった緊張状態から解放され、祝祭など引け目を感じることも無く参加できることや交流できることに改めて喜びを感じる。

二〇二三年も引き続きロードバイクを介したりサーチから更なる展開となった。余談であるがロードバイクを介したコミュニティの広がりや私が乗り出した二〇二〇年当初よりも広がりを見せているのではないかと想像する。私と同様にコロナ禍に目覚めたサイクリストや、コロナ禍が落ち着き、以前の様に外出できること、さらに自身の体験を映像編集して動画配信する人、ソーシャルネットワーク（SNS）を活用して様々なつながりをつくっていく人など、潜在する様々なタイプのサイクリストが相当数存在すると言える。自転車はグループで乗るのも楽しいが自身の体力や趣味に合わせて一人で乗るのも楽しい。この楽しみをSNSなどで情報発信、共有しながら一人ひとりの価値観をも理解し合い、共有もする。健康、自然、観光、食、職など様々であ

る。それぞれがかけ合わせによって予想外の経済発展があちこちで起こっている様に感じている。

はじめは石山寺門前にて代々地域観光を受け継ぎながらも自身の感性や生き方に拘り、和菓子と自転車の異種を徹底し、かけ合わせを提案する「おかみ」のスタンスに焦点を当てた。次に近江と若狭の県境で、新たな鯖街道ブランドを提案するカフェを経営しつつ、自転車普及から観光推進までサイクリスト、観光、行政を中継して橋渡しに翻弄する夫婦の活動を追う。そして近江今津で代々受け継ぐ和ろうそく職人の地域活動に目を向ける。和ろうそくづくりの拘りと、コロナ禍で消滅しかけた「高島おどり」の再燃のプロセスとその盛り上げ方の拘りについて、最後は新旭の一風変わったカフェ経営者にアプローチをかけた。本業の葎葎きから展開した古材商のパイオニアを紹介したい。

何をとつてもその地域に唯一無二の環境、歴史、文化を継承しつつも、新たな価値創出を見出し、生業として成立させている。それは単にものづくりやその技術継承といったものではなく時代の流れや生活スタイルの変化に気づきつつ、それに抗う姿勢だけでなく未来思考型の哲学を提案し、かけ合わせや組み合わせを実践することで「無形の価値創造」へとつなげ構築する。四者の試みを具体的に見ていく。

## 一、石山寺門前のおかみ

石山寺を目指すライドは度々挑むコースである。

いつもなら東海道からのアプローチだが、浜大津へ出て琵琶湖岸を走ることにした。螢谷を過ぎたあたりで石山寺の山塊を避ける様に瀬田川が東側へ蛇行する。瀬田川岸（湖岸）から道へあがると銅板葺き唐破風仕立ての煙だしが屋根に乘る特徴ある建物が見えてくる。これまで石山寺に行く機会があると必ず立ち寄る場所で何か親近感を感じながらも訪ねるには至らなかつた。今回は満を持してこの「石山寺の懐」を開けることにした。

### ・一枚板の看板

建物入り口、ひさし屋根の上にある一枚の板に「茶丈藤村」と掘り込まれた看板が掲げられている。これは大津市景観重要広告物指定第八号に二〇一三年に指定を受けた景観広告物である。これは大津市が二〇〇三年に古都指定を受け、まちなみ景観の魅力を伝える「古都大津」の景観を構成する重要な要素としたものである。実はこの指定に当時私は関わっていた。歴史的風土特別保存地区とその周辺を対象に坂本と石山寺周辺地域の調査選定が行われた。「茶丈藤村」の景観広告物（ひさし看板）は重厚感があり、店主とその父親が一緒に作り上げていくことが評価されたと記憶している。現在も指定から十年になるがその様相は年月を経て趣が増し、特徴ある建物と同時に街並みを形成する要因と言える。

### ・手製のロードバイク

「茶丈藤村」は和菓子を出す甘味処である。その入り口付近にサイクルラックが常設されている。それはサイクリストが立ち寄り易く、「歓迎のサイン」と受け止めることができる。暖簾もさることながらこのラック設置は開店を意味し、横にロードバイクが必ず一台ある。それは紺色のクロモリ（スチール）製フレームの自転車だ。白いレーザーサドルに揃いのバーテープがハンドルに巻かれている。ブレーキや変速機はシルバークロームでビンテージ物が選択されている。フレームには通常メーカー名が記されているが「BIWAKOGUMA」と見たこともない名が入っている。フレームサイズが小さいことから女性用であることなど、少し自転車の知識がついてきた私は持ち主が只者では無いと予感していた。以前、お店の人に聞いたところ「店長の手づくりなんです」と返答があった。鉄の溶接、溶断などを作品制作の手段としてきた私としては何か親近感の湧く思いであった。

### ・高校からのロードバイク歴

閉店前に伺った時だ。店主の徳永真理亜さんは髪を後ろで結い割烹着姿で現れた。ロードバイク歴は高校生からで石山から京都の高校へ通学に使っていたとのこと。大学を卒業されて直ぐ大手ホテルに就職するが一年半ほどで離職。その後、当時石山寺門前で志じみの釜飯屋を生業とされていたお父様に相談を持ちかけ、この地で和菓子屋を開くことを決断

する。島崎藤村が二十歳の頃、石山の地「茶丈密蔵院」に寄宿していたことを伝える意図で店や建物に反映させた。看板の字は当時の天龍寺管長の書に写し、手彫りして制作されたそうだ。その時お父様から開店の条件に「たばしる」の文字を使うことを言い渡される。これがお餅の中に釜揚げ大納言の小豆と胡桃が入って「ゴロツ」とした食感が楽しめる和菓子「たばしる」だ。「石山の石にたばしる霰かな」という松尾芭蕉が詠んだ俳句がある。句意は「石山寺の礎灰石に勢いよく降ってははじけ飛び散る霰のさまは目にも耳にもなんと心地のよいものだろう」。この感じを表現するお菓子として創業時（一九九五年）に出来上がったとのこと。子育てが落ち着いてきた二〇一二年頃からロードバイク熱が復活する。競輪場のイベントで、比叡平にアトリエを構えオリジナル自転車の制作ワークショップを企てるエンジニアと出会い「ピワコグマ」の活動が始まる。これはロードバイクのフレームを設計して制作し、完成した自転車を自ら乗って走る。そしてレース出場などのコミュニティを広げていく活動だ。おかみは紺色のクロモリバイクを制作した後、北海道ニセコで開催されるグラベル（砂利道）レースに出場するため、二台目のグラベル用バイクをまたしてもクロモリで制作し、レースに出場した。カーボン素材で様々な形状フレームが開発される昨今、ホリゾンタルフレーム（伝統的な自転車の形）に拘りトレンドに左右されないものづくりや考え方を重視しているところが面白い。現在は自転車の活動は落ち



写真1 石山寺門前に建つ「茶丈藤村」



写真2 大津市景観重要広告物指定第8号のひさし看板

着いてきている様がおかみの自転車が店前にあることでサイクリストの穴場として定着していることは間違いない。

茶丈藤村の地は先々代の頃、宿屋を営まれていたそうだ。その後、おかみが開店するのを機に建て替えて一九九五年より事業が継続している。石山観光協会の複数いる副会長も歴代徳永さんが務めてきたとのこと、様々な活動が重なり石山寺門前は今日の賑わいにつながっている。

一見別々に見えるお店開店、和菓子開発、自転車だが、おかみの継続した企てが見えてくる。

昨年末に取材の主旨を伝える打合せに伺った時はランニング姿での対面であった。数ヶ月後に開催される市民マラソンに出場するため、トレーニング中とのことだった。割烹着姿は女性を家内に留めるイメージもあるがランニング姿やサイクルウェアに変化するおかみは「その反動かな？」と言いつつ、割烹着姿で自転車を愛でる様子は、自身の在り方と地域の持続を頑張り過ぎずに示す態度に見えた。



写真7 ロードバイクを愛でるおかみ



写真5 店前のサイクルラックとおかみのロードバイク



写真3 和菓子「たばしる」



写真8 ひさし看板の元となった書



写真6 店主の徳永真理亜さん



写真4 おかみのロードバイク (BIWA GUMA)

## 二、鯖街道の起点

若狭の春を告げる神事「お水送り」に数年前から縁あって参加している。三月二日、若狭神宮寺に湧く水を奈良へ送る神事だ。近くの遠敷川わたうがわの瀬と呼ばれる地で湧水を注ぐことで送られる。大陸の文化が若狭へ渡り、近江を通じて奈良へ伝播されたことを今に伝えている。そして鯖街道の名が示す通り若狭で水揚げされた物資が峠を越え、近江を通じて京へ運ばれたことは言うまでもない。現在は熊川宿を通じて今津方面へ抜ける国道三〇三号と、鶴の瀬上流からおにゅう峠へ、近年整備がされた近江へつながる道がある。

お水送りのご縁から若狭神宮寺へ通う様になつていつも目にするカフェがある。県境から九〇メートルほど福井側にある道の駅若狭熊川宿、その向かいに位置する「Saba\*Cafe」だ。店先には「サバサンド」と書かれたのぼり旗が立ち、サイクルラックが設置されている。さてパンとの相性はどうか？と思いつつ店に入る。店の壁面に自転車レースが投影されている「鯖と自転車」一見つながりにくいが興味深い。メニューを見ていると「蕎麦屋さんでうどんを頼む様なものですよ！」と男性の声、思わずサバサンドを注文する。恐れながらも一口食べた瞬間、予想以上の美味で思わず「うまつ！」と心で叫ぶとその男性と目が合った。その人、反田ただ和宏かずひろさんになりお話を聞く。

まずはサバサンド、郷土の代表的食材である鯖を

素揚げし、レタスと玉ねぎを一緒にバゲットにはさむシンプルな料理である。地域の交換留学事業の受入れで出会ったトルコ人の結婚式に呼ばれ、現地へ渡航した際に食したサバサンド「バルック・エキメッキ (Balik Ekmeği)」が原点だ。二〇〇八年にこの地を見つけ大阪より移住。これまで続けてきた商業写真の仕事を持続しながらも熊川の地で新たな暮らしが始まり、二〇一二年より「Saba\*Cafe」をスタートさせる。

次に自転車である。反田さんは商業写真を生業に車での移動が中心である中、納品や打合せなどの機材運搬を伴わない業務用にスポーツバイクを購入したのが原点でその機能性と機動力の高さに惚れ込む。様々な国で仕事を進める中、レンタカー利用から自転車利用への転換を考え始めるが出先でレンタサイクルは非常に困難で対価に見合わない。そんな時、高級自転車を良心的な費用でサブスクリプションでできる仕組みに出会う。それはロンドンのサイクルウェアブランド (Rapha) 創始者のサイモン・モットラム氏が自転車メーカーと連携する試みで、会員登録すると世界各国でその自転車がレンタルできるのだ。彼の名言「ロードレースを世界で一番メジャーなスポーツにする」に触発され、反田さんはエタップデュツール (ツールドフランスの一区間を走る一般参加レース) に参加するなど本場のサイクリング文化に魅了される。そしてその文化を若狭に呼び込む活動へ、まずは自身の拠点「Saba\*Cafe」が日本で初めて Rapha のパートナーカフェの一つとして指定

を受け、コアなサイクリストが若狭へと入る起点づくりから始まった。二〇一五年には地元でのサイクリング文化基盤づくりとしてサイクリングクラブワカサ (CWKS) を創部させ三方五湖湖周道 (ゴコイチ) をサイクリングしながら清掃活動をする事に着手する。その後コース開拓、サイクリングマナー向上を目的としたツアーライド、他団体との連携や健康促進、環境保全などサイクリング普及を通じて地域活性の可能性を広げる。二〇一八年には国土交通省の自転車活用推進計画を福井県内推進に注力しつつ世界中のサイクリストとつながるイベントに参加するなど、その受け入れ態勢を学びネットワークを広げる。反田さんの本業の写真は広報活動としても並行する。二〇二〇年、コロナ禍であったが地元開催のサイクリングイベント「Rapha プレステージ若狭」開催のコースディレクションを行うなど現地側の無くてはならない牽引者となる。二〇二一年、若狭湾サイクリングルート (愛称わかさいくる) のナショナルサイクルルートの指定に向け本格始動する。様々な業務に対応するため、株式会社 Saba & Co (サバアンドシーオー) を設立。サバカフェでのサバサンドの販売以外にも事業展開が進み取材した当日も翌日の地域イベントに向け、パートナーで代表取締役のりょうこさんは仕込みに余念がない様子だ。最近ではバゲットも自家製になり更に味、品質への拘りに熱が上がっている。

二〇二二年には若狭湾サイクリングルート推進室

(わかさいくる室)がナショナルサイクリングルート認定を目指し福井県に設置された。七月には反田さん自身が代表理事を務める一般社団法人 WAKASABAY PRIME を設立して自転車に関する事業からアドベンチャーリズム、地域文化体験、物産企画、飲食、宿泊など目的を持って訪れる人々のためのニーズに応える態勢づくりとその発信をスタートさせている。

お店を出て「Saba\*Cafe」の裏手にガレージが建っている。そこには反田さんが若狭の山、海、湖を充分に走れる仕様の自転車の展示と消耗品の販売や簡単な修理対応も行う「Sabakaido Cycling Hub」を案内していただいた。ここには彼が数年の活動で築きあげた様々な関係を示す写真やグッズも展示されており「夢の自転車小屋」といった感じだ。

最後に、反田さんは「目的を持って訪れる人々を受け入れる態勢づくりが重要」と話された。宿泊施設も地元の暮らしを垣間見ることのできる民宿に魅力が向いている。用意され過ぎたツーリズム志向から目的を持った旅へ、知らない場所で自身を試す志向へと変化しているのだ。移住者であるからこそ見える視点であろう。近江から若狭へ入る起点となる地で新たな価値が芽生えている。



写真9 おにゅう峠より近江を望む



写真10 桜の「鶴の瀬」



写真15 Rapa プレステージ若狭 メインビジュアル (写真: 反田和宏)



写真13 「Saba\*Cafe」店内の様子



写真11 若狭熊川宿の「Saba\*Cafe」



写真17 「Sabakaido Cycling Hub」内部



写真16 「Sabakaido Cycling Hub」外観



写真14 反田氏夫妻「Saba\*Cafe」の店前にて (反田氏提供)



写真12 サバサンド

### 三、今津のろこく

七月上旬になると毎年の様に私のスマートフォンが大きく振動する。着信を見ると大西巧おにしぎょうの文字が、高島市近江今津を拠点とする「近江手造り和ろうそく大興」だいよ四代目社長その人である。そこでの第一声は「高島おどりをどうかしない」という一言で、気づけば話しながらそれを持続するための当事者として策を練る一員になっている。二〇二三年はコロナ禍が五類感染症に位置付けられたことにより比較的人々の行動が自由になった。二〇一八年より始まった近江今津駅前ローラン名小路商店街で十二カ所の高島おどりを全て踊りきるイベントだ。コロナ禍で盛り上げることが出来なかったことからこの二〇二三年は大事な年になる。

さて、大西巧氏であるがこの商店街近くに店舗と仕事場を構える和ろうそく職人である。彼とは滋賀県のブランディング事業や地域クラフトフェアの開催など、協力し合った半ば同志である。今回の懐はその活動に焦点を当てる。

「近江手造り和ろうそく大興」は一九一四年(大正三年)、彼の曾祖父の代に今津栄区で始まる。既に当時ろうそくの需要は下降を辿りつつあり、庶民にとって燃焼効率の良い和ろうそくは贅沢品だったそう。硬化油、パラフィンなどの成分がろうそくのメインとなり大興も一時期は顧客のニーズに合わせた様々なろうそくをつくっていた。祖父の代、江若鉄道廃線に伴い現在の地へ拠点を移す。店前の道

は線路が敷かれ北へ少し行った場所に今津駅があった。そして父、明弘<sup>あきひろ</sup>さんの時代に大きな転換を迎える。これまでの安価で臭いや燃焼など不安定で苦情が多い石油系のろうそくづくりを一切止め、手間はかかるが無臭で自然素材の燻<sup>くも</sup>ろうそくに切り替えた。うるし科の燻の実を乾燥させ、絞ったロウを温め、芯に直接掌でかける「手掛け」を繰り返してつく。当初はそれを売ってお得意さんが少なく相当苦労したそう。瀬田唐橋近くの金物屋さんが取り扱ってくれたことが支えになっていと伝え聞く。二〇一四年、いよいよ大西さんに代替わりする時に三つのことを行った。ブランディング、ホームペー  
ジのリニューアルとお店改装、そして新しいプロダクトとして「米糠ろうそく」を取り入れた。これは燻の生産地、それを摘む人の減少から原料入手が困難になる。日本の経済成長の反面その問題が表面化したのだ。次なる素材として植物由来の米糠からロウをとるろうそくづくりを選択することになる。火と人の関わりを見つめ直す「hitohito（火と人）」と名付けお米のろうそくとして新たに大興の商品に加わった。大手の百貨店への営業活動、クラフトフェアなどの催事に出店するなど様々なアプローチを行った。「実はそれでもなかなか厳しかったです」と振り返って大西さんは言う。二〇一九年秋よりアメリカ西海岸からニューヨークへと本屋、洋服店、インテリアショップ、レストランなどに営業をかけた時にあることに気づいた。もともとキャンドルを日常的に使用する文化でレストランの

テーブルに無臭のエコなろうそくは一目置かれていた。そして二〇二〇年コロナ禍に入る。人々は行動を制限され外出できなくなったこの頃から売り上げは徐々に上がり始める。全世界の人間がもう一度、自然環境との関わりを考え直す時間となった。エコフレンドリー、サステナビリティが本場に自分ごとになってきたのだろうか、和ろうそくの灯<sup>ひ</sup>は社会情勢を見つめ直すきっかけとなり自分自身と向き合うツールとなったのである。コロナ禍前の営業が身結び、今も発注が続いている。また、今日のソーシャルネットワークがつくる「推し活」文化からの影響もある。日本の手仕事を推す俳優がこの和ろうそくを評価したことがきっかけとなり、注目する若い女性ファンが増えた。ろうそくと言えればこれまでは地縁からのつながりが主たる営業範囲だったと言える。お寺から仏壇屋、線香屋、金物屋から地域へ広がると想像できる。しかし大西さんの社長就任から様々な準備が漸く今、実を結んでいると言える。礎となった曾祖父からの火種を消さず先代の大きな決断を経て、誰もが使いすぎるエネルギー時代に疑問を持ち始めた今、石油を使わない和ろうそくがささやかな燈<sup>ともしび</sup>をつけている。

「高島おどり」であるが大西さんが二十六歳の時に遡る。今津の市民ホールでNHKのど自慢大会が開催された。友人と出場して本選に勝ち上がり当時人気の楽曲を歌って鐘が二回鳴った。そのあとアナウンサーに「高島でやりたいことはありますか？」と聞かれ「高島音頭の音頭とりやって高島音頭を広

めたいです!!」と答えたことが始まりになっている。会場に居合わせた保存会の人の目に止まり、数年を経て大西さんの「高島の盆踊り歌保存会」活動が始まった。大西さんは公民館などで普及活動を企てるが思う様に進まない。この実情を漫画家イラストレーターで「盆踊る本―盆踊りをはじめよう! (青幻社) 漫画担当のチャンキー松本氏に依頼し、「高島おどり物語」として漫画化した。二〇一八年からそのイメージをポスターにして年々その広がりを見せている。地域で受け継がれる文化には必ず隠れたキーパーソンがいる。取材の最後に「何でも急にはできません。その時が来るまでに準備しておくことが大事なんです」と語った。



写真 20 燻の実



写真 18 「近江手造り和ろうそく大興」4代目社長 大西巧氏



写真 21 改装された店の玄関



写真 19 「高島おどり」2023年版ポスター

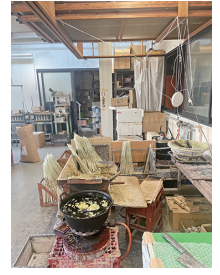


写真22 燗ろうそくをつくる仕事場



写真24 「お米のろうそく」ティーキャンドル



写真25 「お米のろうそく」ブロックキャンドル



写真23 名小路商店街での高島おどり



写真26 店頭に並ぶ燗ろうそく

#### 四、新旭の古材商

二〇二三年は十一月に入っても夏日を記録するなど、サイクリストにとっては「まだまだ乗れる」という期待を抱かせる。その反面、突然の風雨に晒されるなど気候変動の厳しさを感じざるを得ない。左回りで琵琶湖大橋西詰をゴールに設定する私は今津から大溝までのライドが一番辛い。湖西地域唯一の平野に比良山系からの横風をまともに受け、葎原を横目に湖岸をひたすら踏み込むイメージだ。新旭駅近く、湖西道路と並行する道沿いに倉庫の様相を呈した喫茶がある。数年前から幾度か本を持ちこみ長

居する誰にも教えたくない隠れ家「喫茶古良慕」を紹介したい。

店先より何やら古いタンスや柱などが配置してあり苔の絨毯が迎えてくれる。扉を開けると様々な年代の古道具で構成された喫茶室が広がっており中でも江戸期の扉であるうか、それをテーブルにした席がお気に入りだ。そこで店主の島村義典しまむらよしのりさんと話すことができた。喫茶開店は二〇一三年と比較的最近であるが実はそれ以前の歴史がとても分厚いことがわかった。古材を扱うのだが正式名称は「島村葎商店」とある。名前にある通り元々は葎（葎／よし）

葎きを専門とする商いを曾祖父の頃から始める。創業一九〇二年（明治三十五年）より琵琶湖に群生する葎、三メートルくらいに育ったものを刈り取ってストックする。そして高島の葎葎き職人を集めて県内外のあらゆる民家の葎葎きと修復を行っていたそうだ。戦後、屋根材の主役の変化に伴い葎葎きの仕事が減退していく。仕事が無くなれば職人の技の持続もできなくなる。一九七〇年代になると琵琶湖総合開発が始まり、湖と陸地の間がはつきりと区切られていくことで人々の暮らしは変化していった。並行する様に一九七九年で葎葎きの仕事を終えることになる。

喫茶から少し離れた古民家移築した事務所で改めてお話を聞かせていただいた。ここでもあちらこちらに古材が積まれている。玄関にたどり着くと広く取られた間取りの一つひとつが古材で生まれ、所々に埋木がされ丁寧に修復された後が確認できた。リ

ビングに通されるとそこが先代の父、信義のぶよしさんが様々な研究者や顧客を招き入れて仕事をされていた場であることに気づいた。ここから本題に入る。葎の仕事が少なくなると同時に葎葎き屋根の古民家を解体する話と一緒に聞いてくる。葎葎き職人は当然その民家がどの様な材で生まれ、その価値や意味を理解している。八十年代半ばから九十年代にかけて新建材にとって代わり効率よく建築が進む時代だ。信義さんは逆行する様に唯一無二の古材の価値をいち早く見出し京都の建築家と一緒に古民家移築のビジネスに舵を切った。

今でこそリノベーションは様々な展開を見せているが、スクラップアンドビルドの始まった時期、古材商という概念が未だ無い時代にいわば信義さんはこの世界のパイオニアと言って良いだろう。年老いて古民家を手放す人（売り手）、解体業者（バラシ）、工務店（再構築）、古民家移築を待っている人（買い手）、この四者の間に入ってマッチングを行う。出来る限り捨てるもの出さず、出来る限り四者の負担がない様にマネージメントする。そして古材を扱う技術、その知恵や工夫を、地域の職人に仕事を通して持続させる。これをモデルとして現実化させたのが信義さんの残した古民家の仕事場だ。現在はシヨールームとして開放している。リビングの奥の茶室、階段、二階の居間など快く見せていただいた。その組合せは遊び心のセンスを感じさせる一方で全てが古材の利活用であることがわかる。島村さんは「古民家は状態が良ければほとんど捨てなくて済む



のです」と語る。古材商は古民家移築の話がまともれば、工務店や解体業の力を借りて、古材に「磨き」の作業を施すことで蘇らせることができる。また先人の保存技術は有害物質を使用しない工夫もあり環境に配慮がある。活かすも殺すも最初に物件を見てその行方をイメージできる古材商にかかっているのだ。この経験と磨かれたセンスは人間にしかできない仕事であることは間違いない。

さて、島村さんであるが専門学校卒業後、父親譲りの組み合わせるセンスを活かし、和食で自身のセンスを磨く。京都祇園の日本料理屋で修行しつつ、新しい料理屋店舗の内装を古材で手掛けた仕事に携わったことが契機となり、信義さんの継承者となっていく。葎商からつながる県内外の古民家移築を受け継ぎ、自身が磨いた料理の腕をも活かしつつ、古材商の仕事の魅力を次世代に伝える場づくりをスタートさせた。それが「喫茶古良慕」である。共創を意味するコラボレーションと「古き」「良き」暮らしを持続してきた人々を「慕う」気持ちが進められている。現在は遠く海外からの依頼や商店内装の部材活用など多岐に渡っている。島村さんとの話は尽きないが湖北余呉から急な電話が入ってきた。何かトラブルがあったかもしれないとのこと。「ちょっと行ってみますわ!」と。地域のひととの関係を最優先する姿に「目利き」としての責任感が伝わってくる。その後、彼がつくる昼御膳を古材カウンター席でいただいた。



写真 31 「島村葎商店」事務所のリビングルーム



写真 29 「喫茶古良慕」表札看板



写真 27 「喫茶古良慕」お気に入りの扉のテーブル席



写真 32 「島村葎商店」古材で組み上げた柱

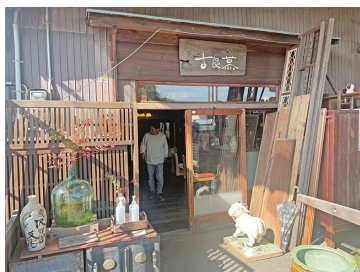


写真 30 「喫茶古良慕」古材に囲まれた入り口付近



写真 28 「喫茶古良慕」ギャラリー展示室

紀要の冒頭は、二〇二三年五月に COVID-19 が五類感染症に位置づけられ暮らしが日常に戻りつつあることに始まり、コロナ禍をきっかけにロードバイクでの活動が主となり、そこで得られた情報や気づきが新たな展開につながることを示した。以前に比べよりローカルで、よりリアリティに満ち、よりチャレンジなことに絞られている様に自身を俯

追記



写真 35 島村義典さん



写真 33 湖岸道路 (ビワイチ) 横に群生する葎原

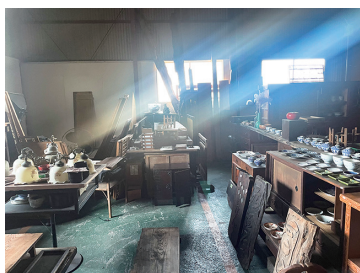


写真 36 倉庫内に並ぶ古材と古道具



写真 34 「島村葎商店」古民家移築のモデル

瞰して捉えている。目に見える実像と言うよりは、要因の重なりから派生していく「無形の創造性」に着目している様に感じている。

二〇二四年元旦、自宅近くの小椋神社の初詣を終えて数年振りに家族全員が揃う正月を迎えることができた。ここ数年の報告を互いに話し始めた矢先、またしても世の中を震撼させる出来事に見舞われる。最大震度七、石川県能登地方を中心に発生した地震を気象庁は即日、「令和六年能登半島地震」と定めた。翌日二日の夕刻、今度は羽田空港滑走路にて震災支援で離陸準備していたとされる海上保安庁機と着陸したばかりの日航機が衝突炎上する事故。「日本航空五一六便衝突炎上事故」が起こり、その瞬間映像を何度も報道を通して見ることになった。久し振りに通常の正月を迎え安寧を祈願した瞬間の出来事であり、近江学紀要をまとめる一月中旬現在においても冷静に事態を捉えることは難しい。事態を早急に把握し即応することを絶えず求める社会であるが、「一旦踏み止まり事態を受け入れることも必要ではあるはず!？」と考えることもできると感じた。

コロナ禍という自然の脅威に全世界が向き合ってきた今、我々は何を振り返り学ぶのか、感染症の脅威が少し収まってきた今であるからこそ、自然の脅威と向き合った状態を維持すべきだ。時には減速させ、抗うことを止め、受け入れる姿勢を維持したい。